

ISSN 0910-2396

野鳥たより

—北海道—

第 91 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成 5 年 3 月 21 日

シロフクロウ 岩見沢 3. 1. 28



撮影者 若林信男



もくじ

鳥見人からの便り (5).....	新城 久・泉 勝統.....	2
「ニューヨーク探鳥記」.....	和 久 雅 男.....	3
野鳥の俳句 (後篇).....	斎 藤 新一郎.....	4
野鳥のかるた.....	三 船 幸 子.....	5
早起きは三文の得.....	谷 岡 隆.....	6
探鳥会報告.....		8
探鳥会案内.....		10
鳥 民 便 り.....		10

鳥見人からの便り (5)

水鳥は泣いていた…。

新城 久・泉 勝統

昨年12月23日朝、新城車で生振に向う。久振りの晴天。伏籠・茨戸川合流点の茨戸中央大橋を渡り左折する。

“アレ、あのアイサ変だ”と新城(S)。「あんな所にあがっているのはオカシいな」と泉(K)。午前中に野鳥撮影と、水鳥調査を了る予定なので、その時は通過した。

正午過ぎ帰途につく。「チョット寄って見ようか」とSは車を廻した。カワアイサ(♀)は、朝と同様で腹部を雪面につけ腹這の姿勢を変えず、全く動かない。Kは急ぎプロミナをセットして覗く。Sは地形の凹面を辿り乍らゆっくりと近づきカメラを構えた。人影に気付いて鳥は羽ばたいた。“STOP。脚に釣糸が巻きついている”と叫ぶK。いくら羽ばたいても、空中に浮かない。Kは慌てて斜面を駆け降り、鳥と河岸の間に割りこむ。左手で翼を軽く押え、右手を腹部の下にそっとさし込み持ちあげようとしたが、錘がガッチリと雪面に凍結していて駄目だ。手早くSが錘の糸を切り、足に巻付いた糸を慎重に切離してゆく。「釣針が水搔と脚に3本刺っている。2本は取れるが1本は深く刺さり、手におえない」とS。

どうやら、このカワアイサは潜水採餌中に、水草に絡まり放置された釣針が水搔に刺り、錘もつけたまま、この堤防まで辿り着いたものらしい。ここで針を外そうと腕ぐり裡に、ますます糸は脚にからまり自縛の形となったのだろう。このまま水面に飛込んだら溺死するに違いない。

ともかく……ということアイサを籠に入れ、上衣を覆って暗くしてK宅に運ぶ。Sは早速、道新谷口記者に電話して方策を相談、円山動物園に話を付けて貰う。急ぎ車で運んで行くより方法はない。

幸いなことに同園の向井獣医が、急遽手当をしてくれ、更に強制供餌……3匹も小魚を飲み込ませ……もしてくれた。片足骨折はあるが、翼は大丈夫との事なのでホット安堵、礼を述べて辞去する。

どうしたらよいか……自然に帰す時期は？……両者しばし沈黙。今夜一晩の勝負だという。Kは突然、あそこ

に放そう。一番安全な場所にだ。そこは開水面が広く、水際に堤防なく、狐も近づいていないところだ。仲間のアイサも沢山いる……と。急ぎ車を生振に走らせる。

目的地に着きSはダンボール箱を開き、そっと抱えて水際においた。“トンダ、翔んだ”50m程飛んで、すぐ潜水採餌を始めた。“ヤッター”……しばらく沈黙。そして異口同音に“腹へったなあ”と。時に16時20分。

今回、カワアイサを「自然に帰してやる事が出来たのは、偶然にも好条件が重なったからだと思う(註)。

- 1) 水鳥が凍水上でなく、陸上に辿りついていたこと。
- 2) 普段いる筈のカラス群、上空を飛んでいるオジロワシ、オオワシらが、その日は姿を見せなかったこと。
- 3) 谷口記者や向井獣医さんの助言・援助を戴いたこと。
- 4) 我々が2名であり、車のあったこと……等々。

ともあれ「タッター一羽の水鳥を放鳥するだけでも、こんなに手数がかかり大変なことなんだ」と実感した。

今でも、カワアイサの群を観察し乍ら、微動だにしないあの鳥の体温、驚く程軽い体重、そして力なく開いていた瞳、などを忘れることが出来ない2人である。

(註)ワイルドライフ・レポート (No.8 92-96) p92 「傷病鳥をどう考えるか」竹田津実

〒001 札幌市北区北28条西14丁目3-40 (新城)



動けぬカワアイサ 4. 12. 23. 新城 久

「ニューヨーク探鳥記」(ルノワール・セントラルパーク)

和久雅男

[1] ハドソン河を渡り、頭上を飛んで行く鷹を見る会

開催期間：9月26日～10月17日 10時から

場所：Lenoire Nature Center 構内

指導員：自然保護区とセンターの主事バートン氏

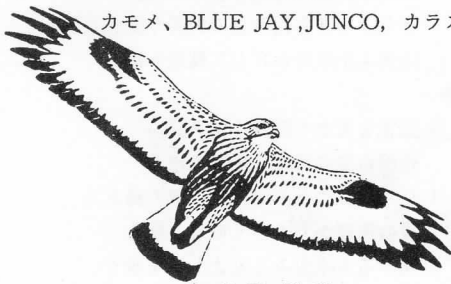
参加料：無料

快晴の日を選んで参加。駐車場は30台で満杯。8割は日本車。歴史的建造物である開拓時代の煉瓦造り2階建の馬丁舎の内部を改造した管理事務室、展示室、講堂工作場、車庫そして物置に分かれている。センター建物に入っても無人。裏手に回って鬱蒼たる針葉樹と紅葉した広葉樹の混交林を縫って走る小道を辿って小高い草原に出るとバートン氏を囲んで数人の中年、若年の男女の白人が望遠鏡で探鳥している姿が見えた。遅参を詫びると、好きな時に来て、好きな時に帰って良い。開会、閉会の挨拶、鳥合わせも無いとの返事が帰ってきた。河に向かって右手上流遙か彼方から2羽、3羽と10～20分おきに姿を見せる鷹が頭上高く左手の南方に飛び去った。400ミリでは到底意図する写真は撮れなかった。鷹の観察のベストタイムは気温が低下し北東から強風の吹き付ける朝10時迄と高齢アマチュア鳥写真家が助言してくれた。カナダガンの編隊が上空高く羽ばたく姿を時々見せ南方に飛び去った。夜には月光を浴びて鳴きながら南方に渡る姿が頻繁に見られた。

<見た鳥>鷹(6種)、カナダガン、スズメ、キツツキ(2種)

[RED-BELLIED WOODPECKER, YELLOW-BELLIED SAPSUCKER]、

カモメ、BLUE JAY, JUNCO, カラス



空を飛ぶ鷹

(付記) ルノワールネイチャーセンターはマンハッタンの中心グランドセントラル駅から25分でグレイストン駅下車、徒歩約10分で到着する。摩天楼の櫛比する都心から至近距離にあるウエストチェスター郡の自然保護区で、下記のメッセージを寄せられた郡職員のナチュラリスト

主事バートン [BARTON] 氏の下、オズボン協会と提携協力し探鳥会を始めとして活発な教育、啓蒙、保護、保全活動を一年中展開している。

《現地で購入した野鳥グッズ》

Birds of North America Eastern Region The Quick Identification Guide For All Bird-watchers Macmillan P.C. \$9.95

Peterson First Guides to BIRDS Houghton Mifflin C. \$3.95

[2] セントラルパーク探鳥の記

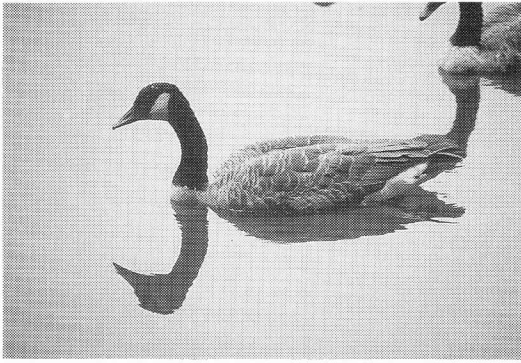
ゼスチュアたっぷりユーモアに溢れた説明助言で皆を微笑ませ、鳥以外の動物(ほこら住まいの狸、栗鼠)、植物にもその解説が及んだ。ニューヨーク市内では滅多に見れないカロライナレンが姿を見せたと皆大喜びした。最後に湖畔で水鳥(まがも、がん、しろ鷺)を見て終了時間となり解散となった。開会、閉会の挨拶、そして鳥あわせも無く、終了時刻が迫るといつの間にか参加者も姿を消し、気が付くとナチュラリストの側には三人しか居なかった。2年前の様に警官のガードもなく、それだけに日中公園内の治安が改善されたようだった。

探鳥回遊コースは東南部のバードサンクチュアリ内ではなく、博物館寄り中央部から南側にベセダ噴水を遙かに望む湖岸までの広大な公園内にあった。

土屋文男氏によると、開園以来記録された鳥は二百五十九種に及ぶとのことであるが、僅か2時間の遊歩で見られた鳥は次の通りである。

SONG SPARROW, BLUE JAY, RED-BELLIED WOODPECKER
WHITE THROATED SPARROW, AMERICAN ROBIN, AMERICAN CROW, COMMON GRACKLE, BROWN CREEPER, GREEN-BACKED HERON, RING-BILLED GULL, RUBY-CROWNED KINGLET, NORTHERN CARDINAL, MALLARD, BLACK DUCK, WHITE-BREASTED NUTHATCH, NORTHERN JUNCO, CAROLINA WREN

水面に浮ぶカナダガンの群



(付記) 探鳥野外教室は毎年9月、10月の毎週 火曜日は7時-9時、木曜日は9時-11時の間開催されているので、ニューヨーク観光旅行のおり、半日自由時間が持てれば参加が可能です。バードウォッチャーなら英語が解らなくても、皆に付いて歩けば楽しめる筈です。小生のように唯一人の外国人であっても、皆さん方はとても友好的で、聞けば喜んで教えてくれます。

〔北海道野鳥愛護会の皆様方への言葉〕

北海道野鳥愛護会の皆様方のご来訪を歓迎します。保護区とセンターの管理運営、企画、教育、展示など全ての活動に関わっています。今年開所5周年記念祭を迎えました。オズボン協会とは密接不離な協力関係にあるばかりでなく財政的援助も受けています。乱開発と汚染から貴重で美しい地球の自然を守る為、ともに力を尽くして行きましょう。…バートン氏から

(小生のリクエストに応えてのインタビュー記事からほんの一部分を抜粋要約しました。ご希望の方には英語音声吹き込みテープをお貸し致します。日本語に翻訳したプリントも差し上げられます。現地で収集した英文自然保護運動、愛鳥運動、探鳥関係資料もお貸し致します。

〒068 岩見沢市4条西4丁目1番地

野鳥の俳句 (後編)

斎藤 新一郎

トビ

鳶の輪や樺戸雪嶺青味ます
木の芽風鳶は斜に空を翔け
信号所雪解の谷に鳶舞ひて
陽炎のめまひや鳶の輪のゆるく
大風の残る秋空鳶羽撃つ
落葉松の半裸に鳶の羽づくろひ

ミヤマカケス

団栗豊作かけすの騒ぐこともなく
樞鳥をつれて紅葉里に来る
木枯しや樞鳥山を追はれたり
かけす来て去りぬ刈田の孤立林
かけす来て隠しもの掘る冬の雨

その他

岩棚に糞の落書き海鵜去る
うぐひすに根曲り苗の根元踏み
中空に芽ぐむポプラやうその笛
桜山美声の鳥も花を待つ
鶯の声艶めく雪を割りにけり
鶯せはし芽吹き初めたる藪の中
桜桃の鳥を集めて色づきぬ
発つ鳥が雪に撒きたるななかまど
芦の花沼には地鳴ばかりなる
水鳥のけふは影なし沼凍る
海狭く明けたり鶯の舞ひ初めて
海明けの河口の砂洲の群鶯
春耕や地虫を拾ふ群鶯
団栗を拾ひてをれば四十雀
クマガラの太鼓不作の森を越ゆ
熊啄木鳥の叩く枯れ木に洞あり
下萌えて青鷺一本脚で立つ
谷地田十枚こぶし山から鷺降りぬ
朝の塵鶉つづいて寒雀
春浅く窓の雀の京言葉
鶉鶉のまづ雄鳥が渡り来ぬ
トラクター今朝せきれいの巢籠れる
岩ツバメ崖をなだむる土留めダム
曉の空白鳥は高く北帰行
榛の花大きな鳥は北へ飛ぶ
風に揺れ芽ぐむポプラに掠鳥戻る
きちきちきち百舌鳥の縄張り芽吹き急
山笑ふ小手をかざして鷹追へば

雑詠

窓霜を掻きて野鳥の安否問ふ
給餌台寒の半ばは過ぎにけり
ひな巢立つえぞ梅雨もよひの榛木立
夏の風邪かくも多くの鳥を聴く
鳥みるも木をみるもよし冬を歩く
花胡桃沢ひろやかに探鳥会
探鳥のあれは山官腰に鉦
一声で十分あの鳥戻りきぬ
探鳥の土堤の広さや蓬摘む
湖の宿灯りを消して鶉を聴く
〒079-01 美唄市峰延町本町北2

野鳥のカルタ

三 船 幸 子

バードウォッチングに出かけて、野鳥との出会いをある人は写真に撮り、またある人はスケッチブックに、テープレコーダーに、観察ノートにと、それぞれに記憶を留めておかれるように、私もそれを和紙で張り表現してみようと思いつきました。

初めて双眼鏡を手にしてからの数年は、野鳥の種類を多く観ることに夢中でしたが、いつ頃から和紙を切ったり、ちぎったりして画用紙に張りつける楽しみを得ました。少しはり絵がたまってきたころ、たまたま探鳥会でとりわけ強烈な印象を受けた鳥を張り終えてから、遊び心で短い言葉を添えてみたのがきっかけになり、イロハかるたとはちょっと異なりますが、なんとかかるた様式のものに仕上がりました。

張っては言葉を添えて、家事の合間に少しずつ作り続

けているうちに、とうとう200組をこえるに至り、探鳥仲間や友人や家人の協力で支えられて、此の度そのいち部をかるた風のはり絵集として出版することになり、タイトルを「北の野鳥と遊ぼう」—私のはり絵集—としました。3月の下旬には出来あがる予定です。

はり絵は、実物や図鑑ほど正確ではありません。専門的な画の知識がなく稚拙な作品ですが、いち主婦の趣味の一端ととらえていただければと思います。ただその野鳥が持つ雰囲気と野鳥への言葉遊びの楽しさを汲んでいただけますなら幸いです。

これからも会員の皆様と探鳥の楽しみを共有し、さらに和紙のぬくもりと奥深さにふれながら作りつづけてゆくつもりです。

〒063 札幌市西区八軒1条西4丁目1-17-55



早起きは三文の得

静内野鳥連絡会長 谷 岡 隆

11月1日、日曜日。念願の“バードウォッチャーの祭典”バードソンに初めて参加した。

探鳥地は静内町内。メンバーは、高木知さんをチーフに、浜田良平さん、永井秀雄さん、谷岡の静内野鳥連絡会の4人。もう一人、太田光子さんが参加する予定であったが、都合が悪くなったとかで、急拠5人から4人に変更となった。

午後5時、辺りは、まだ暗闇の中。眠たくないといえは嘘になるが、不思議と目はぼんやりしている。

天候は曇りで、時折、雨も降るが、普段、起きたことがない時間に起き、いろいろと計画を立てたのに、雨なんか降られてたまるか、と自分勝手に決め込んでいたから、不安はない。

高木さん運転のパンが、最初の観察地、双川に着く。川は9月の集中豪雨で、木の根や大きな石がごろごろしており、以前あった小さな橋も流されていた。

春別川を上流に上る。だんだん辺りが明るくなっていく様と、せせらぎの音がなんともいえないハーモニーとなり、幻想的な夜明けとなる。

ハクセキレイ、セグロセキレイが元気に水面を飛んでいく。高木さんが「いつもなら、ここにカワガラスがいるんだけどな～」と話しているうちに誰かが「いたいた」。見ると川面を潜っては上がり、上がっては潜るカワガラスが見える。それだけでなく、黒っぽくて判別しづらいのに、暗闇だから発見するのは容易な事ではない。

最初の探鳥地、双川ではこの3種類しか確認することができなかったが、渓谷面した川のたたずまいを見につけ、ここには絶対にヤマセミが生息していると思えてならない。高木さんに聞くと、この辺で見たことがあるという返事。やっぱり…。

ヤマセミは、カワセミ科の野鳥で溪流の鳥ともいわれ、一渓谷に一つがという位、数は少ないが、一度はこの目で見てみたいものだ。姿を見ることは出来なかったが、あの林大作（札幌在住カメラマン）さんの一本の木に、何羽もヤマセミが止まっている写真が頭をよぎる。いつかは、写真に撮るぞと心に決め、双川を後にする。

2つ目の探鳥地は高見地区、西の沢。林道入り口に“通行禁止”の看板。車では入れないので、やむなくここから歩くことにする。しかし、ここで歩くことと決めたことが、後程、幸運を呼ぶことになるうとは、この時点では、だれも知る由もない。

西の沢は、写真を撮りによく来たし、国勢調査でも2度ほど、人が住んでいないか、足を運んだところ。

いくら歩かないうちに、浜田さんが、「あれはなんだ」と指を差すが、よく意味が分からない。しばらくして正体が分かった、それは野鳥ではなく、シマリスであった。シマリスが梢に上がり、山葡萄を食べていたのである。

どんな野鳥かの問いに、答えがシマリスとは、初めからスリリングである。

小さくて、かわいい。その隣にイカルが止まっていたが、イカルと比較しても小さく見える。リスがイカルより小さいとは、びっくり。

四人で林道を歩きながら、ベニマシコ、イカル、ミソサザイ、コゲラに次々確認、野鳥の数が増えていく。

狭い林道を野鳥たちが飛び回る。秋とはいえ、つるや茂みに入るとなかなか種類が確認しづらい。

そのうち、谷渡りふうに数羽が飛んできた。「この鳥は、わからない」と高木さん。よく見ると喉の辺りが茶色くなっている。あつという間に鳥たちは去っていったが、判別は不明。

「ヒタキ科ということは分かったんだが」と高木さん。「喉が赤くなっていた」と私。「さてよ、それは大発見だぞ。きっとオジロビタキだ」と高木さん。それではと皆でフィールドガイドを見る。やっぱりそうだ。間違いなくオジロビタキだ。

静内では初めての確認種である。これは凄いと、みんなの士気も一気に上がる。図鑑の“迷鳥”“まれ”という文字と、チームの共同作業で一つのことを成し遂げたということが喜びを倍増させてくれる。この感動が続く限り、野鳥はやめられない。

よかった、よかったと4人。まだ、興奮が覚めやらぬうち、突然、高木さんが叫ぶ「エゾライチョウだ。」姿は見えないが、耳を済ますと確かにあの「ピーピーピー」とエゾライチョウの声に間違いはない。

姿を見たことはないが、北海道にしか生息せず、個体もすっかり減少してしまった野鳥ということで、いつか鳴き声をカセットテープでチェックしたことがある。その時の声と同じだ。

ちょっと見てみるかと高木さんと二人で谷へ降りる。高木さんはカセットテープにその声を録音したいからである。夢中で、落ち葉の上を走るが、急な坂で思うようにいかない。

時折、エゾライチョウの声が谷間に響くが、なかなか姿を見ることはできない。録音も構えてると鳴かず、こちらが移動中には鳴くといった繰り返しで、残念ながら

テープに収めることは出来なかった。

仕方なく、引き上げるかと言った時、なんと目の前に、ルリビタキのオスが愛くるしい姿を見せてくれた。

よく見ると、翼の両翼にルリ色が見える。それにしても、その距離わずかに数メートルという至近距離にもかかわらず、まったく逃げようとはしない。目の前にいる事も驚きであるが、逃げ出さないことにも驚いてしまう。多分、人と出会ったのも初めての事なのであろう。

嘴がいかにもクモ、昆虫類を食べるのにふさわしいフォルムをしているのが印象的だ。

一本のつるにちょこんと乗った鳥。うるさくないバックの茂み。申し分のない至近距離。無理とはいえ、カメラを持っていない悔しさが身にしみてくる。この無念は、今度必ず晴らすぞ。

ツキがあるこの日は、帰り道も次々と個体を確認。キバシリのほか、オオアカゲラ、アカゲラ、コアアカゲラ、コゲラ、そしてヤマゲラとゲラ類も全てが確認できるといった幸運ぶり。結局、西の沢のだけで25種もの個体を確認することができた。

その帰り道、朝日を逆光に浴び、眩しく透ける幻想的な紅葉シーンを見ることができたのも、幸運だった。

ほとんどが落ちてしまっているが、僅かに残った広葉樹の葉が、最後ですよと、競わんばかりの艶やかな色彩を見せてくれる。

この彩りを朝日のスポットライトが引き立てている様子は、誰もが真似のできない、自然界ならではの多重露出、スケールの大きな演出である。

思いがけない収穫があった、西の沢での観察の後は笹山。途中、大規模林道を走るが、どこに行っても、ハンターと出会う。聞くところでは、熊狩りとか。なんとなく、複雑な心境となる。

写真から始めた野鳥も、今年で10年を数えるに至り、年数が立つにつれ、撮影から保護へと変わってきた。とにかく、動物を殺してしまうのは、例え、どんなに動物であっても抵抗がある。

ヒグマの場合は、人里に現れては、人間に迷惑をかけるから、駆除されるのは分かるが、なんとか共存できないものかと考えてしまう。ハンターには、申し訳ないが、どうか、捕まらないで逃げてくれと心の中で祈った。

ヒグマだって生きる権利がある。というより、もともと、ヒグマが先に住んでいた。後から入ってきて、我がもの顔をしているのが、人間である。

ヒグマが変わって勇姿を見せてくれたのが、オスのエゾシカ。大規模林道の北大農場側の金網フェンスに大きく、たくましい白いお尻と立派な角を我々に見せてくれた。

我々を歓迎してくれたエゾシカに感謝したいが、ハンターが近くにいたとあっては、本当に無事を祈らずにおられなかった。

笹山では強風がふき、残念ながら、野鳥たちの元気な姿を見ることはできなかった。時計を見ると9時半になっており、遅くなった朝食をとる。

考えて見れば山野の鳥たちもこの時間は、いわば休憩の時間、のこのこと姿を現す筈もない。

よく考えてみると、西の沢での幸運ぶりも、午前6～8時という、野鳥たちの活動が、一日で最も活発になる時間であり、けして、ただの偶然ではないということが分かる。昔からの諺のとおり、やはり「早起きは三文の得」なのである。

次なる探鳥地は家畜改良センター。車中で話が、シロフクロウの話となり、一年前、ただのフクロウをシロフクロウと某新聞に誤報された場所に到着。

ここには何百年もの長い間、じつとこの地に根を張り、世間の雑多を見守り続けてきたであろう大木が何本もある。

これ程の大木を人里で見ることができもの、昔は宮内省の「御料牧場」、今も農林水産省の「家畜改良センター」であることとけして無縁ではないと思う。“民”でなく“官”だったからこそ現世にも残せた財産であると思う。

噂のフクロウさんはいるのであろうか、残念ながら、いない。良く見ると向こうで、土地の人らしき女性が手招きしている。なにがいたのであろうか。

そっと木を見上げると洞がある。よく見るとあのフクロウさんが眠たそうに目を開けたり、閉じたりしている。よく出来た天然の洞とフクロウの組み合わせ、相性度は抜群である。

その女性の話では、夏の一時期と夜になるとこの洞からいなくなるとのこと。夜行性だから夜いなくなるのは理解できるが、夏の時期いなくなるのはどうしてか分からないが、きっと繁殖期になると、林の中にも入ってしまうからであろう。

さて、最後の探鳥地は浜田さんのホームグラウンド静内河口。

ここは、周年、日を選ばずして野鳥の観察が出来、なおかつ、市街地の側という格好の野鳥の観察地である。今は、カモメ類は夏鳥と冬鳥の両方を観察できる。

この時期、産卵が終わったサケが餌のセグロカモメにオオセグロカモメ。ハクチョウの餌を横取りし、町民の悪役となっている、すばしこいユリカモメ。体が大きく風格がある冬鳥シロカモメ。ネコのようなミャオという声で鳴くウミネコ。冬鳥であるがカモメ中でも最も可愛いカモメ。その名の通り、足の指が3本しかない海洋性のミツユビカモメ。滅多に見る事が出来ないズグロカモメとカモメ科だけでも8種を確認した。

この私、野鳥の観察はまだまだであるが、中でもこのカモメ類は、良く判断できないでいる。種類が多い上に幼鳥期の羽根は成鳥と違い、どれもよく似ていて全く

始末が悪い。すぐ分かるのは、ユリカモメ、シロカモメくらい。

ところで、カモメといえば、どうしても青い海と白い雲を連想、“真夏の鳥”のイメージがつきまとうが、その実態は違う。

例えば、先程の8種のカモメの内、夏鳥は一羽もない。僅かにオオセグロカモメ、ウミネコの年中いるものを除き、後のカモメは全て冬鳥である。この日に限らず夏鳥のカモメはいないのである。

この辺が野鳥の面白いところであり、知っているようで知らないことが多いのが、野鳥なのである。

話が横道にそれてしまったが、この日、静内川で確認出来たのは、マガモ、コガモのカモ類など全部で24種であったが、やはり、ハクチョウのことに少し触れてみたい。

この日確認できたのは、オオハクチョウ、コハクチョウ、そしてアメリカコハクチョウの3種。

中でも、アメリカコハクチョウは、最も興味がある野鳥の一つなので、語れば長くなるが、簡単にまとめると、○このアメリカコハクチョウ（以下＝アメコ）は、日本で確認出来るのが僅かに数羽という珍しいハクチョウである。

○昭和63年から静内川に渡来し、今年で5年連続になる。

○今年は、まだ、良く分からないが、つがいらしきコハクチョウと一緒にいる。

○静内川というより、北海道で越冬するのはほとんどがオオハクチョウであるのに、なぜ、コハクチョウに属するアメコが静内にやってくるのか。というのもコハクチョウが越冬するのは本州であり、北海道ではあまり例がない。

○オオハクチョウ、コハクチョウともシベリアで繁殖するハクチョウなのにこのアメコは、その名の通りアメリカのアラスカが繁殖地である。

などなど、実に興味深い要素がいっぱいであることに着目すると、アメコが、がぜん面白くなってくる。いや、興味を引かずにはおられなくなってくるのである。

ともあれ、正午にバードソンを無事終了した。時節がら、ご多分にもれず寒い日であったが、楽しい一日となった。同行の皆さんと、姿を見せてくれた野鳥たちに感謝。

「早起きは三文の得」とは、よくいったものだ。日頃、不節制ざんまいの自分には耳が痛い諺だ。

*バードソンとは

日本野鳥の会が主催する“バードウォッチャーのお祭り”。今年は11月1日が実施日。4人一組となり、何種類の野鳥を見聞きするかを競う。本来はチームで、個人スポンサーを募り募金を集めるが、今回、募金は実施せず、楽しむことを目的としたマイバードソン。楽しみながら自然保護できる、欲張りなイベントです。

〒056 静内町こうせい町2丁目5-16



はじめての探鳥会
—宮島沼—

4.10.11

星 雄 二

私の職場の熱心な会員のT氏から、ときどき鳥の話を聞かせていただいているうちに、実物を見たいと思うようになり、入会させていただきました。

さて、この日の宮島沼は天候良好で、沼の対岸の水面上には水鳥がいっぱいでした。借りてきた8倍の双眼鏡で見るとどうやらカモの仲間らしいのですが、細かなところまでは見えません。望遠鏡を覗いている人達は何やら鳥の名前を口にしながらわいわいと楽しげにやっています。望遠鏡を羨みながら、双眼鏡の中の小さい鳥の姿を追っていると（カモ鍋、カモナン）などと良くないことを連想しはじめるので、誰かの望遠鏡を覗かせてもらおうと思っていると、T氏が声をかけてくれ望遠鏡を覗かせてくれました。大きくなった鳥の姿が視野の中にとぐと迫り、体の特徴がよくわかります。その中に、シジュウカラガンというめずらしいのがいるらしいのですが、私にはなかなか見つけられません、T氏の奥様も親切に説明してくれるのですが、2回見てもわからず、「今右に向いている…」などと教えていただき、3回目で見つけることができました。

それにしても会員の皆さんの熱心なことには驚きました。自然保護を頭の中で考えるだけで、自然をよく観察することが少ない自分にとって非常によい刺激になりました。できれば自前の望遠鏡を用意して、またぜひ参加させていただきたいと思います。

〒005 札幌市南区澄川6条11丁目14-18

<記録された鳥>宮島沼 カイツブリ、ミミカイツブリ、ハジロカイツブリ、アオサギ、トビ、マガモ、コガモ、マガモ、カルガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、カワアイサ、ユリカモメ、キジバト、オオジュリン、カワラヒワ、ニュウナイスズメ、ムクドリ、シジュウカラガン 以上22種

鏡沼 カイツブリ、トビ、ヒドリガモ、コガモ、マガモ、カルガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、キンクロハジロ、キジバト、アオジ 以上11種

<参加者>宮田貞子、成澤里美、目黒和子、山地正芳、吉田慶子、伊東裕二、牧野洋子、井上公雄、谷崎篤、小西良明、新城久、田辺至、富川徹、星雄二、栗林宏三、山田良造、泉勝統、森田新一郎、米村勇・ミツエ、柳沢信雄・千代子、服部光博、田中金作・礼子、笹谷敏郎・京子、武沢和義・佐知子、野坂英三、石橋和子、明石誠二、綱島詔雄・征子、清水朋子、松井昌、戸津高保・以

知子、広川淳子、香川稔、大町欽子、温井日出夫、浜田強、柿崎熙・敦子・空・海 以上47名
<担当幹事>富川徹、赤石誠二

小樽港探鳥会に参加して

4. 12. 13 早川 いくこ

小樽港の探鳥会に初めて参加した。初対面の鳥達に、私は気分ウキウキだ。オオワシ・シノリガモ・シロカモメ・ホオジロガモ・ハジロカイツブリ・コオリガモ・ウミアイサの7種は今回初めてだ。恋焦られるように、又穴が開く程に鳥の本を見て、やっと本物に会えたのは、最高だ。今日は天気にも恵まれ、がっちり着込んでいった私は、興奮も手伝って汗をかく程。バスで移動し最初行った祝津では、いきなりオオワシの旋回を見る。新品のフィールドスコープも買い込み、この日にかかる思いは人一倍。しかし、なかなかその視野に入らず四苦八苦。岩に同化しそうな色のウミウは冬でも日向ぼっこを続けている。トドの近くの海面に“シノリ”の声。綺麗だ。白のペインティングが見事。ペインティングプロレスラーのキマラそっくり。次の祝津漁港では、お目当てのシノリガモの大群は居ず、次の目的地に期待をかける。北浜岸壁は、今日の目玉。ホオジロガモ100羽程。二列縦隊に長く伸びた一群を何度見ても飽きず、白と黒のモノトーンの色調に、今年の流行りだよ、と言ってやりたい。そろそろ引き上げる頃、一勢に飛び立った様もすばらしかった。目の赤いハジロカイツブリ。潜水すると仲々出てこないから、もぐったのも忘れてしまいそう。コオリガモ(2)は、ホオジロガモに負けず劣らずモノトーンの天才。第3埠頭で昼食をとりながら、ウミアイサ(♀)とハジロカイツブリ(2)。1羽は、頭の色調からミミカイツブリかもしれないとのこと。貯木場ではウミアイサ(2)・シノリガモ(3)・コガモ(1)。いつもはもっとコガモが居るそうだ。最後に北浜岸壁に戻る。ホオジロガモ(60)、少し減った。鳥合せをすると、ウミガラス・ウミスズメなどもいた。スタート出遅れのため確認できず残念。ケイマフリがいなかったのも心残り。26種の内、14種。初心者にしてはまあまあかな。今日一日鳥を見ただけなのに幸せな気分になれたのは最高な事と思う。皆さん又、お会いしましょう。12月13日。

〒062 札幌市豊平区中の島1条7丁目11-8

<記録された鳥>ハジロカイツブリ、ウミウ、ヒメウ、トビ、オオワシ、ハヤブサ、コガモ、スズガモ、シノリガモ、コオリガモ、ホオジロガモ、ウミアイサ、ウミネコ、カモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、シロカモメ、ミツユビカモメ、ワシカモメ、ウミガラス、ウミスズメ、ハクセキレイ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 以上26種

<参加者>田中礼子、佐々木武巳、矢野昭二・玲子、佐々

木友子、今泉秀吉、山田文彦、井上公雄、佐藤ひろみ、小堀煌治、竹内強、道場優、大町欽子、清水朋子、今野弘、田中志司子、小野木弘司・幸子、戸津高保・以知子、赤石誠二、野坂英三、五十嵐、加藤、星雄二、羽田恭子、平尾恒、まきのようこ、栗林宏三、西川喜久世、山田良造、梅木賢俊、柳沢信雄、加藤、山田としえ、志田博明・政子、大野信明、石橋和子、富田寿一、三船喜克・幸子、早川いくこ、米村勇・ミツエ、森田新一郎、浜田強、杉田範男・智恵子、巳亦ミヨ子、川守田順吉、渋谷弘子、川端功治、榊川弘子、遠藤幸子、吉田司・行子、佐藤幸典、服部光博、太田2名 以上61名 野鳥の会小樽支部 23名 合計84名

<担当幹事>中野高明、渡辺俊夫、井上公雄

白鳥園での暖い冬

5. 1. 17 武本行和

自然ウォッチングガイド紙上で探鳥会を知り、参加させていただきました。藤野へ住むようになって6年が経ちましたが、白鳥園は2・3度、外のみを見せていただくばかりで、建てもの中からのバードウォッチングは初めての体験でした。小澤さんが鳥達への愛情をこめて守っておられる園の、その心の暖さが、冬のウォッチングの暖となって、のんびりと鳥達の飾らぬ姿をながめることができた次第です。今日は気分がいいからと聞かせて下さった江差追分の澄み切った声は、厳冬の凜とした鋭さと溶け合って、長い年月、北の大地と調和しながら、自ら自然の一部として生きてこられた柔らかな生活の柄として、耳に心地よく感じられました。そしてこの鋭い柔らかさが、反自然の形で跋扈する現代文明に対して、かたくなに対峙できる強さなのだということも知りました。面白く楽しい自らの合いの手と、力強い凜とした声と、それをとり囲む笑顔の人々。建て物の外を安心して舞い飛ぶ小鳥達。そしてそれ等を包みこむように降り続ける雪。かまくらの中で暖い冬の語らいを楽しむように、新年の愛護会の探鳥会は進んでゆきました。新しい年を迎えて、心強く感ずるひとときでした。

〒061-22 札幌市南区藤野4条4丁目349~134

<記録された鳥>シジュウカラ、ハシブトガラ、ヤマガラ、ミヤマカケス、アカゲラ、ハイタカ、シメ、ツグミ、ゴジュウカラ、スズメ 以上10種

<参加者>泉勝統、久田伸一、戸津高保・以知子、武本和義・佐知子、大町欽子、泉屋宣志・恵津子、新妻博・トキコ、今野弘、吉田司・行子、田中礼子、松井昌、小島マサヨ、小堀煌治、武本行和、成沢里美、赤石誠二、道場優、矢野玲子、野坂英三、秦昭男、竹内強、富田寿一、菅沼良三・郁子、温井日出夫・潤子、平尾恒、後藤禮子、犬飼弘、松野有秀、野崎 以上31名

<担当幹事>竹内強、矢野玲子



【野幌森林公園】

平成5年5月9日(日)
森の中はクロツグミ・キビタキ・ゴジュウカラの囀りととてもにぎやか。葉の出揃わない今は探鳥に最適です。滅多に聞けないキバシリの美しい囀りが聞けるかも。

・9時大沢口駐車場入口集合(新札幌より夕張バス)
千歳川周辺一泊早朝探鳥会 平成5年5月15~16日
年に一度の一泊早朝探鳥会です。夜、温泉に入り鳥見仲間との鳥談義に花を咲かせるのは楽しいものです。16日は午前4時からの探鳥となります。森林、草原、溪流と観察範囲も広く数多くの鳥との出会いがあるでしょう。

○なお、16日の朝食は持参のこと。

- 日時=平成5年5月15日(土)19時より交流会
16日4時より探鳥会開始。午前中解散予定
場所=「支笏湖ユースホステル」
千歳市支笏湖温泉番外地 TEL0123-25-2311
会費=3500円程度 宿泊料(夕食付)朝食持参
集合=19時支笏湖ユースホステル、または18時JR千歳駅待合室(マイクロバスが迎えに来ます)
申込=4月と5月の野幌森林公園探鳥会の時。電話の場合は5月14日迄に011-831-8636 戸津宅まで。

【鶴川探鳥会】 平成5年5月23日(日)

5月の鶴川河口には美しい夏羽のシギ・チドリが集まります。赤いメダイチドリやオオソリハシシギを見ませんか。長靴が無難。

- ・9時30分JR鶴川駅前集合

【平和の滝夜の探鳥会】 平成5年6月5日(土)

星明りの中でヨタカやコノハヅクの声を聞きます。稜線をヤマシギが飛びます。夜は気温が下りますので暖かい

服装を。

- ・18時30分平和の滝駐車場集合
・交通=地下鉄琴似駅より市営バス西野平和線平和の滝入口下車、徒歩20分

【植苗ウトナイ】 平成5年6月13日(日)

みどころは草原の歌い手シマアオジ・ノゴマ・コヨシキリです。林の中の歌い手オオルリやキビタキにも会えるかも。

【東米里】 平成5年6月20日(日)

宅地化が進み、東米里も鳥達にとって住みづらくなっています。それでも昨年はカッコウ・アリスイ・アカモズなど31種の鳥が記録されています。

- ・8時30分東米里小学校正門前集合
・交通=地下鉄菊水駅より市営バス米里線東米里小学校正門前

【福移】 平成5年7月4日(日)

豊平川と石狩川が合流する辺りが探鳥地です。草原の鳥の観察が主体ですが、川辺でイソシギやカワセミも見られます。ベニマシコ、ウズラ、シマセンニュウ、マキノセンニュウが見どころ。

- ・8時40分市営バス福移入口停留所横集合
・交通=地下鉄環状通東駅より市営バス北札苗線福移入口下車

野幌森林公園を歩きましょう

平成5年5月30日(日)

平成5年6月27日(日)

平成5年7月11日(日)

- ・9時大沢口駐車場入口集合

何れの探鳥会も余程の悪天候でない限り行います。昼食・筆記用具・雨具等をご用意ください。探鳥会の問合せは011-831-8636 戸津まで。



◆総会のご案内

平成5年度の総会を次のとおり開催いたしますのでご参加ください。

日時:平成5年4月17日(土)
午後2時

場所:札幌市民会館(中央区北1条西1丁目)

議題:平成4年度事業報告

平成5年度事業計画 ほか

◆野鳥写真展のご案内

今年も野鳥写真展を下記の要領で開催致しますのでどうぞ、写真の応募をお願い致します。

写真の送り先:柳沢信雄宅(003)白石区栄通8丁目3-11

写真の締切日 4月15日(木曜日)

◆写真展の開催のご案内

例年通り、拓銀のご厚意により、次のような日時で開催致しますので、誘い合せのうえ、ご観覧ください。

期間:5月7日(金)~5月31日(月)

会場:たくぎん本店地下キャッシュサービスコーナー

〔北海道野鳥愛護会〕年会費 1,500円(会計年度4月より) 郵便振替 小樽 1-18287

☎060 札幌市中央区北3条西11丁目 加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465